

環境事始 二帖 公害博士第一号の誕生

先生が環境の仕事をした頃、世間は如何。戦禍から立ち直って、曾ての三大工業地帯の一つで京浜臨海地区は排煙、排ガス、廃水、火災で悪戦苦闘の状態だった。例えば隅田川河口の豊洲には東京電力と東京ガスの二大工場がフル回転していて、当時の燃料は石炭だから黒煙が煙突だけでなく建て屋の窓という窓から噴出し、道を通るトラックは昼間ライトを点けなければ走れなかった。なおエネルギーが石炭から重油に転換するのは昭和三十六年である。兎に角国も県も市にも対応する公害課などなく公衆衛生係が扱う始末であった。東京都では首都整備局の役人が朝出勤すると屋上から双眼鏡でビルのあちこちから立ち昇る煙突の黒煙を見て、一々止めるように注意して廻るのが仕事であった。神奈川県では衛生試験所の職員がストリップ劇場内の空気の汚れと工場の煤煙を掛け持ちで調べていた。しかし横浜や川崎は公害の先進地区であると同時に対策の先進都市だった。この頃川崎市で指導的役割を果たした人は寺部本次さんであった。この仁は駅近くの市役所屋上で亜硫酸ガスを連続に測定した。石油燃料が普及するに連れて、その硫黄分が大気汚染の主流となったのである。その結果風向きと亜硫酸ガス濃度の相関関係を発見した。つまり臨海工業地帯から汚染が流れて来る。後で考えれば当たり前のことであるが、原因と結果をデータで証明する画期的な意義を持っていた。何となればその後今なお、汚染と被害見れば直ぐ判ることを承服しない業者、御用識者が跡を絶たないのだ。寺部さんは論文に纏めて山口医大の野瀬善勝先生に送った。当時公害の研究を受付ける機関はなく、宇部市はセメント工場からの降下煤塵世界一の名声を得ており、善勝先生はその権威だったからである。こうして寺部医学博士は公害研究第一号となった。後年公害病被害者が国、県および工場を訴えた時に川崎市は除外された経緯は公害研究所長の寺部さんの功績である。因みに第二号はわが半休先生であった。分析の仕事は次々進んで「ガスクロマトグラフ法による大気汚染の分析化学的研究」として理学博士を頂いた。こうして大学院も出ておらず、留学経験もなく大学の先生になった。この際理学と工学同じなのだが、少し考えて将来公害は環境問題と拡大して地球や生物に関係するようになると予想したから理学にした。しかしこの時分は東京都下、神奈川県下汚染を求めて走り回っていた。これもその一つ、東京タワーが竣工したので早速汚染の高度変化を調査した。下の展望台は125m、上の展望台は225m、そしてご丁寧にも1500m上空までヘリコプターを飛ばした。冬の寒い日だった。20の真空瓶を抱えて先生は高い方を担当した。ところが気温が下がってグリースが固まりコックが開かない、連絡が取れずエレベーターは来ない。仕方なく鉄骨の階段を歩いて降りたけれど、死ぬ思いだった。その調査の結果、25mに接地逆転層そして125mにもう一つ逆転層があることが判った。折角の展望台も360度真っ黒いスモッグの帯に遮られて、富士山はおろか東京湾の船さえ見えない。丁度逆転層の真ん中に居た訳だ。かくて東京の空は地上100m辺りのお椀を覆った中で庶民が蠢いている具合が証明された。空気の汚れに関しては空は無限に広いと観てはいけなかったのだ。都市だけでなく日本中が間違いなく潰れ掛けていた。これを官民協力して改善した知恵と努力を思い起こさねばならぬ。